

奉天交渉署作成張作霖爆殺事件調査報告書

——中国側報告書の紹介と訳出——

千葉 正史

はじめに

一九二八年六月四日に発生した張作霖爆殺事件は、そのセンセーショナルな展開により、現在に至るまで注目されることの多い歴史事件と言える。近年もその犯行主体をめぐって定説と考えられる関東軍実行説に対して異説が提起されるなど、関連した文章や書籍が複数発表されているが、事件発生直後の現場の状況に関しては、これまで専ら日本側による調査報告に依拠して特定がなされてきた。事件当日の六月四日と翌五日の二日間にあつて内田五郎領事ら奉天総領事館の人員により実施された現場での調査は、六月二十一日に林久治郎総領事をへて外務省に報告され、現在は刊行文献に収録されて広く参照することが可能となっている。^{*2}近年のいわゆる異説となえる研究も、基本的にはこの報告書に依拠して現場状況の解明を進めており、部分的にはイギリスなどでの新出史料に着目した分析も見られるものの、^{*4}現在に至るまで史料状況に大きな変化はないというのが実情である。^{*5}

本稿は、これまで研究で使用されることのなかった、中国側当事者による同事件の現場調査報告書の存在について紹

介するものである。前述の事件直後に実施された現場での調査は、日中の合同でおこなわれ、中国側からはいわゆる奉天軍閥当局に属する奉天交渉署^{*6}の関第一科長と安第三科長が立ち会ったことが、上記の日本側報告書にも記述されている。その後、両者の連名による共同報告書のとりまとめは中国側の難色により断念され、日本側の単独で報告書が提出されたのだが、実は中国側も独自に報告書を取りまとめ、当局内部での提出に至っていたということについては、管見の限りこれまで言及されることはなかった。先に登場した奉天交渉署の二人の科長、すなわち第一科の関庚沢科長と、第三科の安祥科長とで作成された報告書が、六月六日に同署署長を務める高清和に提出され、同日中には張作霖の代理で奉天省長を代行していた劉尚清や奉天督辦公署參謀長の臧式毅といった奉天軍閥の主要当事者も閲覧するに至っている^{*7}。ただ公表されるには至らず、その後ながら公文書中に秘蔵されてきたのだが、一九九〇年に瀋陽の遼寧省檔案館に所蔵されている奉天軍閥関係の史料を収録した『奉系軍閥檔案史料彙編』が刊行されるに及んで、同報告書もはじめてその存在が世に出ることとなったのである。

筆者は、二〇〇六年に学習研究社から刊行された『満洲帝国―北辺に消えた“王道楽土”の全貌―』に張作霖爆殺事件の現場再現イラストを掲載するにあたって考証の協力を求められ、同事件に関する史料を調査した過程で、この報告書の存在を知るに至った。その成果は同書の内容に反映することができたが、一般向けの読み物という性格上、具体的な史料名などを挙げて紹介するまでには至らず、研究の上で紹介する機会はこれまでもないままであった。中国近現代の交通史に関する研究者ではあるものの、もっぱら清末時期の問題に取り組んできた筆者にとっては、大きく時代が下る同事件は自らの研究テーマの枠外として位置付けてきたところがある。ただ、同事件に関して依然として種々の言説がとなえられ、社会的には一定の反響を呼ぶところがある現状に鑑みると、確かな史実解明の手がかりとなる史料の存在を世に知らしめることは、歴史学研究が果たしうる役割の一つと言えるのではなからうか。

以上のような問題意識より、本稿では同報告書をまず原文で掲載し、その上で広くその内容を理解してもらうために、あわせてその訳文を掲載する。以下、簡単に内容を紹介することにしたが、全体は以下のような構成である。

巻頭言

- 一、事前の警備状況
- 二、車両の爆破状況
- 三、橋梁の爆破状況
- 四、爆弾装着の場所
- 五、犯人の調査

結語

付録 写真対照表

これらの内容は、日本側報告書と比較すると、一定の異同が存在する。大方では一致するところが多いものの、日本側報告書にはない具体的な記述や、異なる内容の箇所も見られる。特に事件の背景を考察する上で論点となる事前の警備をめぐる日中間での折衝の経緯や、現場の満鉄鉄橋の破壊状況に関してそうした箇所が多く、最も論点となる爆弾の装着箇所に関しては、日本側が列車内の上部か、あるいは鉄橋の橋桁と橋脚との接点の二説を併示するのに対して、同報告書は橋脚の上部であると一箇所にしぼって断定している。日本側により示された現場で殺害されたとされる「便衣隊」の死体と遺留品についても、不審と思われる点に複数言及しており、日本側の犯行と明言した箇所はないものの、

全体として日本側の挙動に不信感をいだかざるを得ない内容と言えるだろう。また報告書には、事件直後の現場を撮影した写真十枚が本来添付されていた。残念ながら史料集には収録されておらず、現存するのかどうかも不明であるが、その内容については、末尾に掲載された「写真対照表」から概略を知ることができる。なお日本側報告書にも十三枚の写真が添付され、やはり同様に現存していないが、報告書の中での写真の説明から中国側報告書の写真とは別のものと考えられる。

凡例

- ・ 本史料の原件は、遼寧省檔案館編『奉系軍閥檔案史料彙編』（南京、江蘇古籍出版社、一九九〇年）の第七冊二二二―二二五頁に影印収録されており、これに基づき以下に原文と訳文を掲載した。
- ・ 原文については、筆者の手で句読点および引用部分の括弧書きを施した。
- ・ 漢字の字体は、なるべく原文に従って表示したが、表示困難な字体については、一般的な字体にあらためた。
- ・ 蘇州碼子を用いて表記された数字は、漢数字にあらためた。
- ・ 訂正がなされた箇所は、丸数字で註記して本文には訂正後の内容を掲載し、訂正前の内容を註文に掲載した。
- ・ 末尾の「写真対照表」には、用紙の上側余白に書き込まれた被災車両の配置図も掲載されているが、本稿では省略した。
- ・ 訳文については、筆者により補った部分を「」で示した。
- ・ 註釈を施した箇所は、丸数字で註記した。

【原文】

奉天交涉署科長關庚澤・安祥對張作霖被炸地點老道口勘驗情形給交涉署長的報告（一九二八年六月六日）

為報告事。窃查、本月四日午前八時、科長等奉署長面諭「前往老道口、勘驗爆彈炸裂肇事情形」等因。遵即會同憲兵司令部所長金慕韓・地方檢察廳檢察官陳國翰・省會警察廳科員呂名實・商埠警察局科員于文治、並由地方檢察廳派檢驗吏二名、馳往老道口、即京奉・南滿兩鐵路交叉地點、詳細查勘。適駐奉日總領事、亦派內田領事・八代副領事・折笠主事等到場。嗣又遇見秦少將、及三谷憲兵隊長・三嶋守備隊長、並京奉鐵路山領技士等。謹將查勘情形、分別縷陳於左。

一、事前警備狀況

生事地點、俗稱老道口、係京奉・南滿兩綫交叉地點。南滿路在陸橋上、京奉路在陸橋下。橋有三洞、北兩洞係鐵路、南一洞係通皇姑屯之大道。爆彈炸裂之處、係在最北首之一洞。該處警備、據憲兵司令部各高級職員面稱、事前曾由通達日語之金所長慕韓與日方憲兵分隊三谷隊長商議、陸橋上面、由中日雙方憲兵共同警戒、橋下一帶、則由中國憲兵及稽察警察等^①警戒。三谷隊長、始而面允、繼而聲稱「滿鐵路橋上面、如派中國憲兵加入警戒、有碍日方顏面。該處向歸日本守備隊巡護、不妨仍由該隊担任警備。日方願負完全責任、并為中日双方聯絡免生誤會起見、派日本下士一名・憲兵二名前往、隨時接洽」等語。當日金所長慕韓赴日方憲兵分隊、要求該隊所派之下士及憲兵等同往。既而^②同乘汽車、行將出發、而該隊長復將所派之下士喚回、以奉關東軍司令部命令、橋上完全歸日方警備、不准我國憲兵上橋檢視、只^③由該隊派下士等三名、前往聯絡而已。於是、金所長等始單獨前往該處、並稱橋洞前後、共計派有騎馬憲兵三十名・隊長一員、又由齊司令率領來往壓道一次外、有稽察官數名、及警察等。並因金所長通達日語、故亦派往該處。此事前警備之大概情形也。

二、車輛被炸情形

大元帥乘坐之列車，共計二十輛。被炸毀之車，由機關車起算，係第九輛至^④十二輛，共計四輛。第九輛為津浦東海三號。第十輛為八十號大包車。第十一輛係二一六號飯車。第十二輛係二一四號^⑤睡車。肇事之後，前列之八輛，已開往新車站，即瀋陽站。後列之八輛，已開回皇姑屯。其津浦三號包車，則停在橋洞東首數十丈遠之處。車之上部，為石塊及枕木所毀，後方尤甚，門窗亦多毀壞。車身^⑥向北傾斜，車底板下部毫無損壞。後方左輪，脫出軌道之裏側。此車內有男屍一具，係于參謀長之電車夫。經檢察官驗明，係因打傷後腦致死。驗畢，交屍親領埋矣。第十輛大包車，係大元帥·吳督辦·儀我顧問等所乘。車身幾全毀壞，僅剩前方門及門框，并框側木板而已。後方脫落一軸^⑦二輪，向右傾斜，並有火燒痕跡。此處發見黑焦屍體一具，由其內衣殘片中檢出小皮包一個，內有京奉車免票一張，上面記有「山海公司李子亨」字樣。詢問山海公司人員，則稱「確係該公司飯廳僕役」。經檢察官驗訖，交給該公司人員領埋矣。第二一六號飯車，破壞最甚，所有機輪等件，均已損壞，炸後復被火焚。車之前方北側，有屍一具，全身燒焦，不辨男女，惟以其體格瘦小，觀之似係女屍。已由檢察官驗明，交給警察第六署，備棺驗埋招領矣。又於其近處檢出鑲有寶石之金手鐲一個，小號保險鐵櫃一個，均已交路警保管。第二一四號睡車，前部損壞較重，全體亦被火焚。此車輛被炸之大概情形也。

三、橋洞被炸情形

該處橋洞，上面西首係斜方鐵橋，橋用鉅形鐵板製成。東西兩方，製有整直鐵板之欄杆，中間置枕木，上鋪鐵軌。橋之東首，尚有副橋，係以聯結之兩個鐵保製成。其上滿鋪枕木，以備火車行走^⑧之用。橋洞南北兩側，均係用大形石塊堆砌，成垛三處。橋洞上下構造，均相彷彿。勘驗時，北首鐵橋，完全墜落，其欄杆，正壓在飯車右側。其副橋，則墜落於其南首。副橋之南端，炸有大形洞二處，口徑均逾尺。又中間鐵橋，北首炸壞，橋板有向下方捲屈者。副橋亦墜落在地。副橋之北端，亦被炸壞。橋洞北側石垛上部，墜落石塊有一二層不等。南側石垛上部，石塊幾墜落全高三分之一或四分之一。北側垛有火燒焦痕，南側石垛東部有黃色痕跡，似係炸葯煙氣所燻。其西部亦有火燒焦痕。洞之上部，猶殘留灣曲之軌道

三根。有滿鐵保綫區工人、正在修理。橋洞東首、有電報綫柱及電話綫柱。所有電綫、概亦轟折、亦有日人電綫工夫、正在修理。至北首橋洞下部、京奉鐵路僅燒毀枕木數根、並無凹洞。毀壞車輛移去後、畧換枕木、即可開車、恢復交通矣。此橋洞被炸之大概情形也。

四、裝置爆彈之處所

此次爆彈轟落鐵橋一架、副橋兩架、炸燬火車四輛。南北兩側石垛、亦被轟壞。足証葯性之猛、用葯之多、決非手腕之力所可拋擲。必係預先裝置臨時或係使用電流發火器燃點者。此不過由常識判斷而已。至裝置之處、約可判定在此橋洞南側石垛上方。蓋南側石垛最上部、業已轟毀、殘留之上部、尚帶黃色。副橋之南端、炸毀最甚、且有口徑逾尺之鉅洞。中間橋洞之副橋北端、亦被炸毀。被炸火車之損壞、均係右側較重。依據以上種種理由觀測、大致可以斷定。即內田領事等、亦以此說為然、表示觀察相同。至於爆葯係屬何種使用、分量若干、如何製法、確係如何使用、非專門家不克檢定。既經遴派專門技士前往、實地勘驗、不難查明。此查明爆彈裝置處所之情形也。

五、勘驗犯人

以上各處勘驗之後、據內田領事言「橋洞以南數十丈之處、設有瞭望台。台西沙地內、有便衣隊二人、被守備隊兵刺殺。請同往勘驗」等語。當即偕同檢察官等往勘、行至瞭望台下沙地內、見有二屍。均係刺光之頭皮、年約三十餘歲。胸背均有刺刀貫通傷三四處、腿臂肚腹嗎啡痕跡甚多、體格似非健全。屍傍放置新奉天製革帽兩頂、襪鞋一双。另有襪鞋一双、放置瞭望台傍。據守備隊三嶋隊長及憲兵分隊三谷隊長言「本月四日午前三時半頃、有着華服之人三名、走近瞭望台、被守備隊兵發見、上前盤問。該三人舉手、作欲擲擊狀。守備隊兵即以槍刺突擊、該三人向西逃跑。行至沙地、刺殺二人、其餘一人逃走。迨經檢查、各持有俄國製炸彈一個、搜檢衣袋、查出密信二封。內有不穩言語、可以認為便衣隊。此次爆彈案件、或係便衣隊所為、亦未可知」等語。彼時有一守備隊兵、持來洋磁臉盤一個。內裝鋼鉄炸彈二枚、形似茄子、兩

端畧尖、上端有環、全体有縱橫綫、表面暹方塊形、惟已見有銹。又一守備隊兵、由衣袋內取出信二件。其一信、面書有「潤軒兄啓」字樣、餘一書有「叙五兄啓」字樣。另有一信封、發信人蓋有藍色戳記、文曰「奉天南滿站弥生町十八番地凌寓。電報掛号〇四〇七」、中華民國十七年五月三十一日緘寄。信內有信紙兩張、破碎不全、係宣紙紅格。上部橫書「國民革命關東招撫使用箋」、右邊直書「革命尚未成功」、左邊直書「同志猶須努力」。文內有「中日親善革命成功」及其他暗語。

文尾有「凌印清啓」字樣。詢據內田領事言、「已由日警署派警、前往查拿」等語。復由檢察官驗明傷痕填單、二屍均交警察第六署、驗埋招領矣。此勘驗犯人之大概情形也。勘驗各處時拍有照片十種、理合檢同照片報告署長、鑒核施行。

科長 關庚澤・安祥 謹簽。六月六日。

附呈照片拾張對照表一紙

寫真對照表

- 第一、二一四睡車西半部南側、由東南向西北照
- 第二、二一四睡車西半部北側、由西北向東南照
- 第三、八十包車上面全景、及移動落下之鉄橋、由陸橋上北岸向南照
- 第四、八十包車兩・二一四睡車兩間之全景、由陸橋上北岸向下照
- 第五、陸橋中段鉄板東側北端之炸痕向外捲、及炸孔向外凸全景、由東向西照
- 第六、落下陸橋之鉄板炸孔向外凸、由南向北方照
- 第七、三号津浦包車全景、由南向北方照

第八、落下陸橋鉄板、移去八十包車、向東拉走後之二二四睡車及寔景、由東南向西北照
第九、八十包車移去後、修復鉄軌及寔景、由東南向西北照（換入（燒糊處）新枕木五根）
第十、二二四睡車移去後、修復鉄軌及寔景、由東南向西北照（換入新枕木約六七根）

- ①「等」は後から記入。
- ②「而」は後から記入。
- ③「止」を抹消して「只」に訂正。
- ④「及」を抹消して「至」に訂正。
- ⑤「号」は後から記入。
- ⑥「車身」は後から記入。
- ⑦「輪」を抹消して「軸」に訂正。
- ⑧「行人來往」を抹消して「火車行走」に訂正。

【訳文】

奉天交渉署科長関庚沢・安祥より同署署長への張作霖爆殺地点老道口の調査状況報告（一九二八年六月六日）

報告申し上げます。本月四日午前八時、本科長らは署長より直々に「老道口へ行き、爆彈の炸裂により事變が生じた状況を調査せよ」との指示を受けました。そこで直ちに憲兵司令部所長の金慕韓、地方檢察庁檢察官の陳国翰、省会警

察庁科員の呂名実、商埠警察局科員の于文治、ならびに地方檢察庁から派遣された檢驗吏二名と合同で、京奉・南滿洲兩鉄道の交差する地点である老道口へ赴き、詳細に調査いたしました。たまたま奉天駐在日本総領事^①も、内田領事^②・八代副領事・折笠主事らを派遣して、現場に到着しておりました。その後また秦少将^③、三谷憲兵隊長^④、三嶋守備隊長^⑤、および京奉鉄路の山領技士らとも出会いました。謹んで調査状況を、以下に順を追って説明いたします。

一、事前の警備状況

事件發生の地点は、俗に老道口と称し、京奉・南滿洲兩線の交差地点であります。南滿洲鉄道は陸橋の上を通り、京奉鉄道は陸橋の下を通っております。橋は三径間からなり、北側の二径間は鉄道上に、南側の一径間は皇姑屯に通じる幹線道路上に架かっております。爆弾が炸裂した場所は、最も北側の径間にあたります。同所の警備は、憲兵司令部の高級職員各人の供述によりますと、事前に日本語に通じた金慕韓所長と日本側憲兵分隊の三谷隊長との間で協議し、陸橋の上面は中日双方の憲兵の共同で警戒し、橋下の一帯は中国側の憲兵および稽察^⑥・警察等により警戒することになりました。三谷隊長は当初承諾しておりましたが、その後「滿鉄の橋上にもし中国の憲兵を派遣して警戒に加わらせれば、日本側の体面を損なうことになる。同所はこれまで日本側守備隊の巡回警護に帰しており、これまで通り同守備隊の担任で警備することを妨げるものではない。日本側は完全なる責任を負うことを願っており、あわせて中日双方が連絡をとって誤解が生じることのないよう、日本側の下士官一名・憲兵二名を派遣して、随時折衝にあたらせたい」と伝えてきました。当日、金所長は日本側憲兵分隊に赴き、同分隊が派遣する下士官および憲兵らと同行させるよう要求しました。そして自動車に同乗して、まさに出発しようとしたところ、同隊長は派遣した下士官ら呼び戻し、関東軍司令部の命令を受けたとして、橋上は完全に日本側の警備に帰して我が国の憲兵が上がつて檢視することを不許可とし、ただ同分隊より下士官ら三名を派遣して連絡にあたらせるとしました。かくして、金所長らは始めて単独で同所に

向かい、そして橋の前後に騎馬憲兵三十名と隊長一名を派遣して、斉司令^⑦により率いて沿線を警備に往復させたほか、稽察官^⑧数名と、警察なども配置したと申しました。ならびに金所長が日本語に通じていることから、(同所長自身も)また同所に派遣いたしました。以上が事前の警備状況の概要であります。

二、車両の爆破状況

大元帥^⑨が乗車した列車は、合計で二十両編成であります。爆破された車両は、機関車より数えて九両目から十二両目の計四両であります。九両目は津浦鉄道所属の東海三号〔貴賓車〕、十両目は八十号大貴賓車^⑩、十一両目は二一六号食堂車、十二両目は二一四号寝台車になります。事件発生の後、前方の八両は、すでに新駅すなわち瀋陽駅へ移動し、後方の八両は、すでに皇姑屯駅へ戻されました。津浦所属の三号貴賓車は、陸橋の東側数十丈〔約百メートル前後〕のところに停車しておりました。車体の上部は石塊及び枕木により破壊され、後方が特にひどく、扉や窓も多く破壊されておりました。車体は北側に向かって傾き、底板など下部は全く損壊しておりませんでした。後方の左側車輪は、レールの内側に脱線しておりました。車内には男性一名の遺体があり、于參謀長^⑪の運転手でありました。すでに檢察官が検屍し、後頭部の打撲により死亡したものと判明しました。検屍後は、親族に引き渡して埋葬されております。十両目の大貴賓車は、大元帥・呉督辦^⑫・儀我顧問^⑬らが乗車しておりました。車体はほとんど全壊し、わずかに前方の出入口部分とその周辺の木板が残るのみでありました。後方〔の台車〕は一軸二輪が脱落し、右側に傾くとともに、炎上の痕跡がありました。ここからは黒焦げとなった屍体が一人分発見され、かけらとなった下着の中から財布一個が見付かりました。その中には京奉鉄道の免費乗車券一枚があり、「山海公司李子亭」の文字が表に記されておりました。山海公司の人員に問い合わせたところ、確かに同公司所属の給仕であると回答がありました。すでに檢察官により検屍を終え、埋葬するよう同公司の人員に引き渡しております。第二一六号の食堂車は、最も破壊が著しく、機器・車輪などはいずれ

も損壊し、爆破された後に炎上しております。車体の前方北側には、一名分の遺体があり、全身が焼け焦げて男女の判別もできませんが、ただ小柄な体格であることから、女性の遺体であるように見られます。すでに検察官により検屍し、警察第六署に移して棺に納め、埋葬の引き取りに備えています。またその近くからは宝石をちりばめた金製の腕輪一個と、小型金庫一個も発見され、いずれも鉄道警察に引き渡して保管しております。第二一四号の寝台車は、前部の損壊が比較的激しく、車両の全体もまた炎上しております。以上が車両の爆破状況の概要であります。

三、橋梁の爆破状況

同所の橋は、上面の西側はプレートガーダ式の鉄橋^⑧で、橋桁は大型の鉄板を用いて製造されております。東西両側はまっすぐな鉄板の欄杆を設け、中間に枕木を置いてその上にレールを敷設しています。橋の東側にはさらに副橋があり、連結された二つの鉄材^⑨で製造されております。その上には枕木を敷き詰めて、列車走行の用に備えております。橋の南北両側は、いずれも大形の石塊を積み上げて橋脚〔および橋台〕三基を構築しております^⑩。橋の上下構造は、いずれも同様であります。調査時に北側の鉄橋は完全に落下し、その欄杆は食堂車の右側を押し潰していました。副橋は南側に落下しておりました。副橋の南端には、爆発により大形の穴が二カ所に開き、その口径はいずれも一尺〔約三〇センチメートル〕を越えておりました。また中間部分の鉄橋は、北側が爆発で壊れ、橋板には下側に向かってめくれ上がったところもありました。副橋もまた地面に落下しておりました。副橋の北端も、また爆発で壊れていました。橋の北側の〔橋台の〕石積みの上部は、石塊が一―二段分落下しておりました。南側の〔橋脚の〕石積みの上部は、石塊がほとんど全体の三分の一から四分の一にわたって落しておりました。北側の石積みには火で焼けた焦痕があり、南側の石積みにも東側に黄色く変色した痕跡があつて、爆薬の煙で燻されたものと思われまゝ。その西側にも、また炎上による焦痕がありました。橋の上部には、なお湾曲したレールが三本残留しており、満鉄の保線区職員が、ちょうど修

理に取りかかっておりました。橋の東側には、電報線柱及び電話線柱が建てられています。電線は、ほとんどがまた爆発で切断され、やはり日本人の電線工夫が、ちょうど修理に取りかかっておりました。北側の橋の下部は、わずかに京奉鉄道の枕木数本を焼損したのみで、穴などは開いておりませんでした。破壊車両を移動した後は、枕木を交換する程度で即ちに運転再開して交通の回復が可能です。以上が橋梁の爆破状況の概要であります。

四、爆弾装着の場所

今回の爆弾は鉄橋一基・副橋二基を落下させ、汽車四両を破壊させました。南北両側の〔橋脚・橋台の〕石積みも、また破壊を被りました。火薬の品質の強力さと、使用量の多さを証明するに足ることであり、決して手腕の力で投げ付けられるものではありません。必ずやあらかじめ装着した上でその時に及び、あるいは電流発火器を使用して炸裂させたものでありましょう。これは常識で判断しただけにすぎません。装着の場所については、おおよそ同橋の南側の〔橋脚の〕石積みの上方と判定することができます。ただし南側の石積みの最上部は、すでに爆破され、残留した上部も、黄色く変色しておりました。副橋の南端は、爆発による破壊が最も甚しく、かつ口径が一尺を越える大きな穴が開いておりました。中間部分の副橋の北端も、また破壊されておりました。爆破された汽車の損壊は、いずれも右側の方がよりひどい状態でありました。以上の数々の理由から観測すれば、大体断定することが可能でありましょう。即ち内田領事らも、またこの説を然りとし、見方は同じであることを表明しておりました。爆薬はどのような種類のものを使用したのか、分量はどれくらいか、どのような製法か、確実にどのように使用されたのかということについては、専門家でなければ特定することは困難であります。既に専門技師を選任して派遣しており、実地に調査すれば、解明は難しからぬことでありましょう。以上が爆弾装着場所の調査の状況であります。

五、犯人の調査

以上の各所を調査した後、内田領事から「橋の南側数十丈の所に、展望台[㊦]が設けられている。その西側の砂地のところに便衣隊が二人おり、守備隊兵により刺殺された。検屍に立ち会うようお願いしたい」との伝達がありました。そこで検察官らと赴くこととし、展望台下の砂地まで至ると、二人の死体がありました。いずれも頭を剃り上げ、年齢は三十歳あまりと見られました。胸と背にはいずれも銃剣による貫通傷が三四箇所あり、手足や腹部にはモルヒネ〔服用〕の痕跡が甚だ多く、体格は健全ならざるもののように思えました。死体のそばには新奉天製の革帽二着と「傻鞋[㊧]」靴一足が放置されておりました。このほかにも「傻鞋」靴一足があり、展望台のかたわらに放置されていました。守備隊の三嶋隊長及び憲兵分隊の三谷隊長の発言によると、「本月四日午前三時半頃、中国服を着た三人が展望台に走り寄ってきて、守備隊兵に発見された。進み出て尋問しようとする、三人は手を挙げて、「何かを」投げ付けようとする仕草をした。守備隊兵はただちに銃剣を構えて突進し、三人は西に向かつて逃げ出した。砂地まで追って二人を刺殺し、残る一人は逃走した。検査したところ、おのおのロシア製の手榴弾一個を持ち、ポケットを調べると、密書二通が出てきた。その中には不穏な言葉があり、便衣隊であると認められた。今回の爆弾事件が、あるいは便衣隊の犯行であるのかは、まだ知るよしもない」とのことでありました。その時、一人の守備隊兵が洋磁の洗面器一個を持って来ました。内側には鋼鉄の手榴弾二個が仕掛けられ、形は茄子のようで両端が尖り、上端には環があり「輪をはめられ?」、全体に縦横の線が走り、表面は四角い塊の形を呈していましたが、ただすでに錆び付いておりました。もう一人の守備隊兵は、ポケットから二通の書簡を取り出しました。その一通は、表面に「潤軒兄啓」と書かれ、もう一通には「叙五兄啓」と書かれていました。ほかにもう一通の封筒があり、差出人により「奉天南満站弥生町十八番地凌寓。電報掛号〇四〇七」という文面の青色のスタンプが押され、中華民國十七年五月三十一日に緘封して投函されていました。中には破れて不完全な便箋が二枚あり、赤い罫線の宣紙のものでありました。上部には「国民革命閩東招撫使用箋」と横書

きされ、右辺には「革命尚未成功」、左辺には「同志猶須努力」と縦書きされておりました。文中には「中日親善革命成功」及びその他の暗語が記されていました。文末には「凌印清啓」とありました。内田領事に尋ねたところによれば、「すでに日本側警察署より警官を派遣し、〔凌印清の〕逮捕に向かわせている」とのことでありました。また檢察官により傷痕を確認して簿冊に記入し、二遺体はいずれも警察第六署に移して、埋葬の引き取りに備えています。以上が犯人調査の概要状況であります。各所を調査した際に写真十点を撮影しましたので、写真とあわせて署長に報告すべきものと存じます。ご確認の上で措置をお願いいたします。

科長関庚沢・安祥謹呈。六月六日。

付録 写真十枚の対照表一枚

写真対照表

一枚目 二一四号寝台車の西半部南側、東南より西北に向かって撮影

二枚目 二一四号寝台車の西半部北側、西北より東南に向かって撮影

三枚目 八十号貴賓車の上面全景、及び動いて落下した鉄橋、陸橋上の北側より南に向かって撮影

四枚目 八十号貴賓車と二一四号寝台車との間の全景、陸橋上の北側より下に向けて撮影

五枚目 陸橋中間部分の鉄板の東側北端の外側に捲れあがった爆破痕、及び外側に向かって突き出た爆破孔の全景、

東より西に向かって撮影

六枚目 落下した陸橋の鉄板の外側に向かって突き出た爆破孔、南より北方に向かって撮影

七枚目 三号津浦貴賓車の全景、南より北方に向かって撮影

八枚目 落下した陸橋の鉄板、移動した八十号貴賓車、東側に動かし了後の二一四号寢台車の情景、東南より西北に向かって撮影

九枚目 八十号貴賓車を移動した後、線路を修復する情景、東南より西北に向かって撮影（焼け焦げた¹⁹箇所を）新しい枕木五本と交換）

十枚目 二一四号寢台車を移動した後、線路を修復する情景、東南より西北に向かって撮影（新しい枕木約六〜七本と交換）

①奉天駐在の林久治郎総領事。

②在奉天日本総領事館の内田五郎領事。

③関東軍奉天特務機関の秦真次少将。

④関東軍奉天憲兵分隊長の三谷清少佐。

⑤関東軍独立守備隊第二大隊長の三島勝平中佐。

⑥軍人を派遣して治安維持活動に当たらせることを、「稽察」と称する。

⑦奉天憲兵司令の斉恩銘。

⑧前述の「稽察」任務に従事した軍人を、「稽察官」と称したものと推測される。

⑨当時中華民国軍政府大元帥の地位にあった張作霖を指す。

⑩日本側報告書では「展望車」としているが、原文の「大包車」からこのように訳した。

⑪ 中華民國軍政府軍事部次長兼參謀署署長の王国翰。

⑫ 黒龍江省督辦の呉俊陞。

⑬ 日本人顧問の儀我誠也。

⑭ 原文は「斜方鉄橋」で、意味は不明であるが、実際の構造からこう訳した。

⑮ 原文の「鉄垛」を仮にこう訳した。

⑯ 原文は「成垛三處」で、「垛」に積み上げた構築物の意味があることから、この場合は橋脚と橋台を指すものと思われるが、同橋の橋脚・橋台はそれぞれ二基づつで数が一致しない。とりあえずこのように訳した。

⑰ 関東軍独立守備隊が満鉄線路監視のために設置していた展望台。

⑱ 原文の「傻鞋」がどのような種類の靴か不明なため、仮にこう訳した。

⑲ 原文の「焼糊」は「焼燭」と同義で、焼け焦げるという意味。

執筆後記

本稿執筆のきっかけとなった二〇〇六年の『満洲帝国』掲載イラストの考証は、今は亡き原田勝正先生からの依頼で取り組んだ仕事である。もともと張作霖爆殺事件とは研究の上でも無縁であった筆者だが、中国鉄道史を専門としていたということで、大学院生時代から縁のあった原田先生よりお話をいただき、主として車両の考証を任されることとなった。ただ当時の中国側の車両について手元に十分な史料があるわけでもなく、とにかく一から収集しなければと調

査を進める中で、今回紹介した報告書を発見するに至った。これにより当初七両編成と考えられていた張作霖の乗車列車は機関車を含めて二〇両編成であることが判明し、張が乗っていた車両の配置も特定することができるなど、イラストの描写に成果を活かすことができた。

こうした新事実の発見に原田先生も非常に関心を持たれ、当時再び手をつけられていた満鉄史研究にぜひ取り入れたいとのことで、史料のコピーをお送りした。そして先生を中心にした満鉄史の研究会にも呼ばれることとなり、同年八月に先生のお宅に集まって開かれたおそらく最初の会に参加したのだが、その後先生の健康状態が思わしくなく、研究会はそれきりとなった。その後二〇〇七年の十二月に、先生は二十六年前の著書である『満鉄』の増補版を刊行された。

その中には張作霖爆殺事件についても当然取り上げられていたが、列車の両数を七両とするなど、なぜその内容は旧版をそのまま踏襲したものであった^{*8}。前年にあれだけ関心を持たれたのにもかかわらず、なぜ新出史料の内容に基づいて訂正を加えなかったのかは、翌二〇〇八年の四月に先生が逝去されたことで、ご本人の口からは聞けずじまいとなってしまう。おそらくは晩年の病魔との戦いの中で、かなり無理をして増補版の執筆に取り組まれたのではないかと推察するほかはないのだが、それから七年が経過した今、あらためてその時の史料を紹介するにあたって、原田先生との関わりを述べておく次第である。

思えば日本鉄道史を代表する研究者である先生は、周辺アジア地域の鉄道史にも強い関心を持たれ、その接点たる満洲の鉄道史をライフワークの一つとされていた。その志を何らかの形で引き継ぐことを、周辺アジア地域の側から近代東アジアの交通問題を研究する者として、これからも心がけていきたい。

註

*1 こうした張作霖爆殺事件をめぐる近年の種々の言説に

ついては、秦郁彦『張作霖爆殺事件の再考察』（『政経研究』第四四卷第一号、二〇〇七年五月）、及び同著『陰謀史観』（新潮新書四六五、新潮社、二〇一二年）の第四章を参照。

*2 同報告書は、まず一九七一年に刊行された参謀本部編『昭和三年支那事変出兵史』の復刻本に解題付録として付された稲葉正夫「張作霖爆殺事件」の中に、「昭和三年六月四日満鉄京奉交叉地点列車爆破事件調査報告」として収録された（巖南堂書店、七〇～七五頁）。その後、一九九〇年に刊行された外務省編『日本外交文書』

昭和期I第一部第二巻の中に、「昭和三年六月四日満鉄京奉交叉地点列車爆破事件報告」と、ほぼ同一の題名で収録され、内容も一致している（外務省、一六三～一六六頁）。

*3 さしあたり代表的なものとして、いわゆるコミンテルン犯行説に立つ加藤康男『謎解き「張作霖爆殺事件」』（PHP新書七三四、PHP研究所、二〇一一年）の二二三～二一九頁など。

*4 加藤前掲書二二六～二二三頁。

*5 この点に関しては、以上に述べたような異説に対して批判的な前掲秦「張作霖爆殺事件の再考察」も、やは

り内田領事による報告書に立脚して事件現場の状況を分析している（註42、43）。

*6 交渉署は、中華民国時期に各省省都や開港場に設置された機関で、各地方における外交交渉を担当した。制度上は、外務省にあたる外交部に属するものの、地方当局が軍閥として中央から自立化するにつれて、実質的に各軍閥による独自の外交機関としての性格を有することとなり、当時の奉天交渉署もそのような性格のものとして理解される（貴志俊彦ら編『二〇世紀満洲歴史事典』（吉川弘文館、二〇一二年）七二～七三頁「交渉署」）。

*7 同報告書の作成後の経緯については、日本側とのやりとりにより共同報告書の発表が中止になるまでの過程も含めて、以下の史料を参照。「奉天交渉署為調査張作霖被炸現場後対日交渉情形的報告節略（一九二八年六月十五日）」、遼寧省檔案館編『奉系軍閥檔案史料彙編』（南京、江蘇古籍出版社、一九九〇年）第七冊二四二～二四三頁

*8 『満洲帝国―北辺に消えた「王道楽土」の全貌―』（歴史群像シリーズ八四、学習研究社、二〇〇六年）二八～二九頁掲載の「現場再現 張作霖爆殺事件」の解説文を参照。

*9 原田勝正『増補 満鉄』（日本経済評論社、二〇〇七年）

一一四頁。

〔付記〕

史料の翻訳にあたって、日本大学文理学部の松重充浩氏よりご教示いただきました。ここに付記して御礼申し上げます。